視覚障害者を考慮したデザインの必要性 —包装開発と看護の仕事—

○林 正保（大日本印刷株式会社）

Needs for the design which considered people with visually impaired

- Nurse could contribute in development of packaging -

Masaho HAYASHI (Dai Nippon Printing Co., Ltd.),

1. はじめに

障害者差別解消法が4月1日に施行された。新法は、積極的な障害者が暮らしやすい社会の実現に向け、民間にも努力を促しており、バリアフリーに対する意識の高まりとともに、障害のある方が使いにくいと感じる商品に対してメーカー、販売者は健常者と同様に使えるようなものに変える努力を更にしていくであろうと思われる。

約20年前にバリアフリーということが盛んに言われるようになり、その後、障害のある方を含むすべての人を対象にしたユニバーサルデザインという言葉が使われることが多くなった。

約20年前のバリアフリーさきがけの時代に開発に携わった、視覚障がいのある方へも配慮をしたユニバーサルデザインパッケージを紹介する。

2. 開発事例

(1)片手で開閉可能なウェットティッシュ容器・・・開発当時、先行する他社が販売していた円筒形ボトル製品があり、中身の濡れティッシュを取り出す際には蓋を開けて、両手を使ってティッシュを引っ張り出していた。開発した容器は、手が汚れている時に手の甲などで蓋を開け、片手で中身を取り出すことを可能にした。(図1)

(2)触感で知らせる開封位置・・・食品ラップの外装（紙箱）の改良 クレハ(当時：呉羽化学)は27年前の1989年にクルッと手首を回転してラップをカットするV字型のこ刃に変えた。当時は、V字刃の先端近くを指で押さえて、クルッと手首を回転してラップをカットすることが認知されておらず、刃の末端近くを指で押さえて、ラップの方をめくるように動かしてカットする人が多かったように記憶している。

そこで、ノコ刃中央部の指で押さえる箇所にドットエンボスを逆三角形に10個配列して、指で触っただけで中央部が分かるようにした。(図2)

(3)紙箱のつまみ易い開封口・・・紙箱の開封口を浮かせてつまみ易くしている。視覚に障害のある人でもつまみ部を探し易い。(図3)

図1 1997年発売当時のシルコット

図2 ドットエンボス

図3 つまみ易い開封口

3件の事例は、視覚障がいのある方に限らず健常者に対しても使い易さを提示している。これは、ユニバーサルデザインの考え方、「すべての人にとってできる限り利用可能であるように製品、建物、環境をデザインする」にも適合している。

最近では、国籍、性別、年齢、障がいの有無に関わらずすべての排除されている人を対象に、障害のある当事者が参加して、一緒に考えてモノ作り（デザイン）を進めるインクルーシブデザインという考え方がユニバーサルデザインを実現する新しい手法として注目されている。

3. ユニバーサルデザインの先へ

包装容器のデザイン、開発を行ってきた私たちは、ユーザーの立場に立って考え、パッケージを開発してきたが、製品化したそれらに満足してはいけない。製品化した後も、様々なユーザーの感想や意見を聞き、使用場面を検証して、より良いモノを作る努力を継続的に行ってきたかと問われれば、自信を持ってYESとは言えない。

ユーザーのことをより深く知り、妨げとなっていることを少しでも取り除き、製品・サービスから排除されていた人々が普通に暮らせる社会を実現する努力を今後、益々行うことが必要だ。

障害者差別解消法の施行は、私たちデザイン、開発に携わる者への更なるユニバーサルデザインを促すきっかけとなっていると考える。

4. おわりに

今回の会場である三重県立看護大学には、将来看護師となられる多くの学生がおられます。

看護師の仕事は、患者さんやその家族の最も近くに寄り添ってその不安や苦痛が少しでも和らぐように気を配り、環境を整備し、周囲との関係を調整することで医師をサポートしなければなりません。患者さんが10人いれば10人が皆違い、その対応もすべて変えていかなければならない。

より深く知り、観察し、時には勘を働かせて対応する。それは私たちデザイン・開発に携わる者と同じです。

仕事の内容は異なりますが、看護師も医療分野のクリエイターと言えるのではないのでしょうか。